

## 各水試発トピックス

# オットセイの分布調査に取り組んでいます

平成28年5月9日から27日にかけてオットセイの海上分布調査を行いました。この調査は平成27年度から実施されている有害生物（オットセイ）生態把握調査の一環で、道北・道央日本海におけるオットセイの海上分布を明らかにすることを目的としています。

オットセイは、北太平洋に広く分布する鰭脚類の一種で、夏季にオホーツク海やベーリング海で繁殖し、冬季にカリフォルニア沖や道東～三陸沖まで南下回遊します。本種は日本海にも来遊しますが、その生態はほとんど注目されてきませんでした。しかし近年、日本海では本種と漁業との軋轢が顕在化しており、共存を模索するうえでこの海域への来遊状況の把握が急務となっています。

オットセイは繁殖期以外の時期にはほとんど上陸しません。そのため、日本周辺海域でオットセイがどこにどれくらいいるのかを調べる際には船からの目視調査が一般的に用いられます。船のアッ

パーブリッジから調査員が双眼鏡を片手にオットセイを探します。オットセイは日中、海上で休息していることが多く、慣れてくると簡単に見つけることができます（写真1）。回遊中は基本的には単独で生活していますが、数頭から数十頭のオットセイが集団で見られることもあります。オットセイを発見した際には発見位置、同時に発見した個体数、船からの距離や角度などを記録します。この時期の日本海ではオットセイ以外にもトドやイルカ、クジラなど様々な海棲哺乳類を見ることができます（写真2）。

目視調査の結果をもとに、オットセイが多く分布する海域や分布密度を推定することができます。また、調査船に搭載されている様々な観測機器や衛星画像などの情報を合わせて解析することで、オットセイの分布に影響する海洋環境を明らかにできると期待されます。

（堀本高矩 稚内水試調査研究部）



写真1 休息しているオットセイ。ヒレを海面からあげていることが多い



写真2 群泳するシャチ。遭遇することは少ないが存在感は圧倒的

## 各水試発トピックス

# NPAFC (北太平洋溯河性魚類委員会) 年次会議に参加して

平成28年5月16～20日に韓国釜山市で開催された第24回 NPAFC 年次会議に参加しました。NPAFC は1993年2月に発効した『北太平洋における溯河性魚類の系群の保存のための条約』に基づき国際機関として設立され、『条約区域における溯河性魚類(さけます類)の系群の保全を推進すること』を目的とし、さけます類の母川を抱える加盟国(カナダ、日本、韓国、ロシアと米国)が協力して、科学調査と取締活動を実施しています。

今回の年次会議で私は科学調査について議論する科学調査統計小委員会(CSRS)に参加させていただきました。本委員会ではまず、2015年のさけます類の漁獲量や放流数が報告されました。次に、2011～2015年の科学計画に対するレビューが行われ、2016～2020年のNPAFC科学計画(新科学計画)案も提示され、議論が行われました。また、CSRSには5つのワーキンググループがあり、それぞれのグループでの取り組み結果や計画が報告されました。現在、NPAFCが中心となり、2018-2019年を国際さけます年(International Year of the Salmon; 略名 IYS)に制定し、さけます類と生息環境に関する野外調査を集中的に実施することが計画されています。今回の年次会議ではIYSに関わる議論も多くなされました。

本会議に参加した各国では、主に政府機関と国立の研究機関により代表団を構成していました。道総研からも参加しましたが、アメリカ代表団にも州の研究者が参加していました。北海道は日本におけるさけます類の主要な生産地であり、放流事業や調査研究の中心地でもあります。北海道で

のさけます類の資源評価や来遊予測、その他の調査研究を行う上で、世界的なさけます資源の動向や調査研究の情報を得ることはとても有意義です。最近、北海道を含む日本系のさけます類の資源量は1990年代後半あるいは2000年代前半よりも低い水準で推移しています。さけます類が生育するベーリング海では顕著な水温上昇が報告されており、北海道のさけます類の資源変動を理解するにも世界的なさけます類の資源動向や北太平洋の海洋環境についての情報が不可欠と言えると思います。今後も道総研からNPAFC年次会議に参加する機会が得られることに期待したいと思います。今回、年次会議に参加する機会を与えていただきました日本代表団の岡本純一郎政府代表、水産庁の保科正樹増殖推進部長、北海道区水産研究所の福若雅章さけます資源研究部長、浦和茂彦博士、ならびに関係者の皆様に心よりお礼を申し上げます。

(宮腰靖之 さけます内水試さけます資源部)



写真 会場となったロッセホテルプサンのロビーにて(右から、北水研の福若部長、著者、左は北水研の浦和研究開発専門員)

## 各水試発トピックス

# 今年の秋サケ来遊予測の公表を終えて

さけます・内水面水産試験場では平成15年以降、秋サケの来遊数を予測し、公表しています。当場のサケの来遊予測では、沿岸での定置網で漁獲される尾数のほかに、河川への親魚の遡上数を推定しています。特に、河川に遡上する親魚数が捕獲計画よりも大幅に不足すると予想された地区では、どのようにして必要数の親魚を確保するか、増殖事業協会、漁業者、行政などの関係者が集まり対策が検討されます。親魚の捕獲数に不足を生じると、計画数の稚魚を放流することができなくなることから親魚確保の見通しを示すことが来遊予測の最も重要な役割となっています。

来遊予測の公表は毎年6月下旬あるいは7月上旬に開催される北海道連合海区漁業調整委員会の場で行われます。それに引き続き、北海道定置漁業協会が全道8ヶ所で開催する現地対話集会の場で各地の来遊予測の数値を説明して廻ります。主催者である定置漁業協会の会長や事務局の皆さんと約10日かけて全道を廻るのがさけます・内水面水産試験場の来遊予測担当者の恒例行事となって

います。今年の現地対話集会は7月4日から13日までの間、網走市、中標津町、釧路市、余市町、稚内市、函館市、登別市、様似町で開催されました。来遊予測が前年を下回ったり、河川での捕獲数が捕獲計画を下回る予測となった地区では、説明する時もそれに対しての質疑を受ける時も大変緊張するものですが、現地対話集会は関係者の皆さんの声を聞く大変よい機会となっています。漁業や増殖現場の情報はとても参考になりますので、忌憚のないご意見をお聞かせいただけたらと思っています。

また、例年8月上旬には北海道水産物荷主協会主催の全国サケ・マス・魚卵大手荷受・荷主取引懇談会でも来遊予測について説明しています。さらに、さけます・内水面水産試験場のホームページでも来遊予測の数値を公表しています。たくさんの方に興味を持っていただいているサケの来遊予測ですので、より正確な予測とわかりやすい説明ができるよう努力していききたいと思います。

(藤原 真 さけます内水試さけます資源部)



写真 現地対話集会の会場の様子 (平成28年7月4日網走市)

## 各水試発トピックス

# 中央水産試験場一般公開を開催

毎年恒例の中央水産試験場一般公開を平成28年7月10日(日)に開催しました。

当日は朝からの雨と風で昨年度来場者数269人を下回るのではと思っていたのですが、フタを開けてみると3割増しの350人、しかも午前中の2時間で昨年度を超え、随時受付の9種類の体験イベントブースでは順番待ち、大混雑対応のため臨時で手伝いに入るなど、うれしい悲鳴でした。

直前や当日とドタバタもありましたが、中央水産試験場各部各グループ並びに後志地区水産技術普及指導所の皆様のご尽力により、ケガや大きな混乱も無く終了しまして、あらためましてお疲れ様でした、そしてありがとうございました。

来場者から回答いただいたアンケートによりますます楽しんでいただけた様子が伺えましてありがたい限りです。余市町からの来場が最も多く、次いで札幌市と例年どおりの傾向の中、新潟県という方もおられました。また、水産試験場を知っているが道総研を知らない、道総研を知っているが総合研究機構だとは知らなかったという方が昨年度同様に多数おられましたので、継続的かつ丁寧なPRに今後も取り組ませていただこうと思うところです。

大きな事故等はありませんでしたが反省点は多々あります。駐車場でのスムーズな誘導、各イベント位置の案内方法、変更イベントのお知らせ方法、中央水路の事前安全対策などなど。次年度に向けて更なる改善に努めてまいります。

(池田秀樹 水産研究本部企画調整部)



海の実験室(上)とニシンの骨の観察の様子(下)



地曳き網体験(上)とタッチプールの様子(下)